

【仮題名】 転生したらベルトになった。……………なんでさ！？

ふあんたずむ☆怠惰

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら異世界で変身ベルトになってました。

……いやなんでさ!?

ここはどこ？ あなたはだあれ？

運命求めてドナドナと、変身ベルトといたら特撮だよな!?

え？ 魔獣に襲われ大ピンチ？ 力が欲しい？ ならばその少女、俺を使い！

細かい事は気にするな！ 要するはノリだ！

変身だツ!!

これは、

転生したら変身ベルトだったヒーローオタな青年と、英雄を目指す少女の物語。

？このお話は、色々ぶっちゃけてしまうと、転生して魔物やら神やら無機物になるのがアリなら、変身ベルトに転生するのもありだよネ！
なんて作者のとち狂った発想から生まれた物語でもある。

目次

1話 or プロログのようなもの	1
こつちが本編	
1話 転生したらベルトだったんだが!?	4
2話 唸れ! 俺の超能力(サイコパワー)!!	7
3話 転生ベルトと遺跡泥棒	12

1話orプロローグのようなもの

——雨が、降っていた。

空は黒く、厚い雲に覆われて、辺りには木々が生い茂り、その森はどこまでも深く、人の気配も、小さな灯火もない。

まるで永遠に続く底無し沼のように深い夜の森を、少女は駆け抜けていた。

——走る

——走る

(少しでも遠くに……！・ 引き付けないとーッ!!)

なんのために走るのか。

何者かを引きつけるために、少女は少しでも遠くへと、己の身を突き進ませる。

既にどれくらいの時を続けているのだろうか？

体力は既に限界を迎えており、足は一步踏み出すごとに悲鳴を上げて、その痛みは容赦なく全身へと伝わり、苦痛となって彼女の体を襲う。

——ッ!!

それでも彼女は足を止めない。

歯を噛み締め、痛みに耐えながらも駆け抜ける。

やがて木々が減り先が見えてくる。

あと少しで森を抜けようかという、その刹那——

不可視の砲弾が、彼女を吹き飛ばした。

「——ッア！」

痛みよりも先に、衝撃が全身を包み込む。

直撃こそしなかったが、その威力は凄まじく。

地を砕き、少女の身体を軽々と吹き飛ばす。

「~~~~~ッ!!」

少女は、地面に叩きつけられる様に転がる。

全身を襲う苦痛に、今度は耐えることが出来ずに声にならぬ悲鳴をあげてしまう。

立ち上がるうにも、全身を襲う痛みと痙攣がそれを許してはくれない。

——ドシン！

——ドシン！

地響きが鳴り渡り、その音は徐々にこちらに近づいてくる。

「ヴウルルルル……」

魔獣の唸り声、やがて彼女を追っていた追跡者が正体を現す。

追跡者の正体。それは、一頭の熊だった。

しかし、熊と言うには、その姿はいささか異形である。

通常の熊よりも数倍の大きさを誇る凶体を持ち、その手足にドリルのような螺旋を描いた爪を生やして、風を纏っていた。

その姿はまさしく【魔獣】と呼べるだろう。

魔獣が彼女の元へと近づいていく。

逃げ場はもう無い。それでも彼女は諦めない。

（諦めない……ボクが、ボクがみんなを守るんだッ！）

魔獣がその剛腕を振り上げ――

――死。

少女の頭に死が過ったその瞬間――ツ！！

『うおおおおお！』 上から来るぞ！ 気をつけやがれえ！！』

――声が聞こえた。

そして、空から流星の如く降ってきた『何か』が魔獣の鼻先を殴打した。

「グルアア!!」

突然の激痛に悶える魔獣。

『その少女！』

脳裏に響く声。

「？ 声？ 誰かいるの……？」

『ここだよ、ここ！』

何かが落ちてきた場所、声の発生源場所に視線を向ける。
向けた先、そこにあつたのは――

「ベルト……?」

——少女は運命と出会う。

体が動かない。

そもそも手足の、体の感覚がない。

感覚がないといっても、風や何かが触れる感覚……皮膚感覚の様なものはあるようだ。

あれ、もしかして今植物状態的な感じ？

致命傷で神経お陀仏中？ S正A気N度値喪ピンチ失からの発狂コース確定ですか？

うそだろオイ!? このままこんなところで動けないなんて、嫌だぞ!?

なんとか動こうともがいていると、不意にある光景が目に入った。

視線の先、反射した月明かりが水面を照らし映した自身の姿、それ

は――

ベルト……??

ベルトだった。

いやいや、そんな、まさかな？

もう一度水面を見てみるが、

……ベルトだな、うん。

そこに映っていたのは、神殿の様な台座の上に置かれたベルトだった。

あちこちが錆び付いた銀のバックルに幾何学模様が記されていて、中心にはくすんだ紅色の宝玉が嵌め込まれている。装飾品の様なベルトだった。

認めなたくはないが、俺の中の本能のようなものが訴えてくる。アレは紛うことなき自身の姿であると。

これはあれかな、転生つてやつかな？

死んでベルトに転生とか……それなんてラノベだ。 そんなの見たことも聞いたこともないぞ？

もし仮にタイトルをつけるなら『転生したらベルトになった』とでも言ったところだろうか。

H A H A H A H A H A !

……いやなんでさ!?

いやいや、だって、ねえ?

嫌ではないよ? 人生(?)にもう一度チャンスが与えられたと考

えればね? それにさ、ヒーローみたいなベルトが欲しい! なんて

思った事もあるさ! 男の子だもん。

でもさ、ソレ自体になりたいかって聞かれば違うよな?

流石に、無機物はないでしょうよ……

2話 唸れ！ 俺の超能力（サイコパワー）！！

暇だ。実にH I・M A・D A!!

俺がベルトに転生してから、けっこうな日にちと時間が経った。初めは、やつぱこれ夢なんじゃね？ とか現実逃避を試してみたものの、一向に覚める気配はない。

しかしその時間を通して解った事が四つある。

少ない？ 仕方ないだろうまともに動けないんだから。

一つめ。

ここは異世界である。間違いなく。

何せ、空に白、赤、黄、緑と、四色団子のような並びをした月が浮かんでいる。さらに時々、空飛ぶトカゲトコゲが通り過ぎる。

二つめ。

いつか頭に響いてきた声だが、質問をしてもほとんど返答はない。システムメッセージの様なものだろうか？ 呼び名が無いと不便なので、とりあえず某検索エンジンに因んで「先生」と呼ぶことにした。

頭に直接言葉が響くのが、少し不思議である。

三つめ。

この体には三大欲求がない。

まずは睡眠欲。

幾ら時間が経っても眠くならないのだ。試しに羊や素数を数えて見たが、一万を超えた辺りで飽きた。

次に食欲。

睡眠同様、幾ら経ってもお腹が減らない。それと口が無い。そして最後に性欲。

そもそも生殖器自体がない。魔法使いと賢者の道確定だネ！ちくしょう……………この身体じゃ涙も流れない。

四つめ。これが1番重要だ。

……………転生モノと言えば、やはりあれだろう。

なんかすごい能力！

俺にも身に付いてたりするのかな？　なんて、試した甲斐があった。

ステータス！

《ステータスを表示します》

心の中で叫ぶ。すると、頭に響く声と共にステータス画面を確認することができた。

【名称】：不明

【種族】：インテリジェンス・アーマー

【装備者】：なし

【加護】：なし

【称号】：なし

【攻撃力】 0 【防御力】 120 【耐久値】 1000 / 1000 【魔力量】 100 / 100 【状態】

【耐性】：なし

【魔法】：なし

【技能】^{スキル}：【解析演算】 【鑑定】

【固有技能】^{ユニークスキル}：【同期】^{シンクロ} 【自己進化】 【自己修復】 【自己改革】 【超能力】 【変身】

ステータス画面キターー!!　やっぱりこういうのっていつ見てもワクワクするな！

そういえば、詳細とか見れるのか？

《各ステータスの詳細を表示します》

【解析演算】：対象または事象を解析する。

【鑑定】：目にした物を鑑定する。

【自己進化】：経験を元に進化し続ける。

【自己修復】：耐久値を時間経過で修復する。完全に破壊された場合復

元不可能。

【自己改革】：自身の能力を最適化する。

【超能力】：魔力を消費して、物体に干渉する。持続しているの間、魔力を消費し続ける。

【同期】^{シンクロ}：装備の登録者。また装備登と技能^{スキル}を共有する。適合率が高いほど共有した技能^{スキル}の威力が上がる。

【変身】：鎧をまとうor肉体を変化させ、装備者の全ステータス、回復速度を上昇させる。(装備者の心象によって変化)

おお……これは便利そうだ。

【変身】 っておい。

なんとなく察してはいたがこの体、やっぱり特撮に出てくる様なベルトなんじゃないか？

ヒーローに変身出来るベルトが欲しい！ なんて、子どもの頃に思った事はあるが、まさか変身ベルト自体になるなんて……

人生何があるかわからないものだね、いやマジで。

わからないことを考えていてもしょうがない。

今は置いておこう。

せっかくベルトになったんだ。

どうせならこう、ザ・主人公って感じの「誰かを守りたい」と願う人、正義感のある人に使ってもらいたい。

^{ダークヒーロー}闇の正義なんてのもいいけど、流星に画面の明度や彩度が暗くなるようなのはNGだ。

グロやホラーは苦手なんだよ。

さて、そろそろお待ちかねのスキルを試してみようか。

試すと言っても、まともに話せる相手もない、装備者もない現状。使えそうなのは必然的に【超能力】 ってのになる訳だが。

物体に干渉……干渉？

超能力と言うのだからやっぱり物を浮かせるとかだろうか？

取り敢えず、その辺にある小石に向かって叫んでみる。

【超能力】!!

しかし何も起こらない。集中が足りなかったのだろうか？

集中集中……今度は小石が宙に浮ぶ様をイメージしながら念じてみる。

唸れ!! 俺の【超能力】!

サイコパワー

すると、今度は成功したようで小石が宙へ浮かび上がった。

おお!! 浮いた!

上、上、下、下、左、右、左、右。

俺がイメージする方向へと小石が自由自在に空を舞う。

……これなら、俺自身を持ち上げることでもできるのでは? 思い付いたら即続行! と試してみる。

すると、体が少し軽くなった気がした。無重力にも似た宙へと浮かぶ感覚と共に、俺の体が台座から離れていく。

よしよしよし! ここまでは作戦どうりだ。このまま慎重に行けば——ッ!?

突然、体から力が抜けていく感覚が俺を襲ってきた。それに驚き集中を途切らせてしまうと、俺の体は浮力を失い再び台座へと落下してしまった。

なんだなんだ!? 急に体が怠くなってきたぞ?

《ステータス》

【魔力量】 35 / 100

確認のためステータスを見てみると魔力量が半分を切っていた。

魔力を使いすぎるとこうなるのか……魔力を使い切るとどうなるんだ?

《魔力の回復に専念する為。一時的に全機能が制限されます》

俺の疑問に【先生】が答えてくれる。

携帯電話のスリープモードの様なものだろうか、なるべく魔力を使い切らさないよう気をつけよう。

……今日はもう寝よう。

そうして、あれこれ試していると、あつという間に月日が流れるのであった。

3話 転生ベルトと遺跡泥棒

ベルトに転生してから二ヶ月。

俺はただひたすら、小石を浮遊させて遊んでいた。
うん。

なんというか、飽きた。流石に飽きました。

でも、そのおかげでステータスも……

《ステータス》

【名称】：不明

【種族】：インテリジェンス・アーマー

【装備登録者】：なし

【加護】：なし

【称号】：なし

【攻撃力】 0 【防御力】 120 【耐久値】 1000 / 1000 【魔力量】 1000 / 1000 【状態】

【耐性】：なし

【魔法】：なし

【技能】：【解析演算】 【鑑定】

【固有技能】：【同期】シンクロ 【自己進化】 【自己修復】 【自己改革】 【超能力Lv

3】 【変身】

——何も変わってない？

いやいやいや！ スキルのところをよく見ておくれ。

【超能力Lv3】

ぱんぱかぱーん！ スキルのレベルが上がったのだ！

シュビツ！ シュバツ！ ズババツ!!

見るがいい！ この洗礼された無駄のない浮遊テクニクを！

しかも、以前より持ち上げる時の魔力の消費が少なくなったので、今ではこんな重そうな岩や剣すらも持ちあげられます。

もはや、小石より重いもの持てない貧弱な俺では無いのさ！

虚空に向かってドヤってみる。当然返事などなく、ただ虚しい風が吹くだけだった。

さつきからどこに向って説明しているんだ俺……。

だがしかし、今なら俺自身を【超能力】で持ち上げることができるはずッ！

それ！ 【超能力】!!

すると、前よりも体が軽くなった気がした。二度目の無重力にも似た宙へと浮かぶ感覚と共に、俺の体が台座から少しずつ離れていく。フハハハハ！ 勝ったな、このままゆっくりと上昇して——『ガコツ！』……ガコツ？

も、もう一度！

ガコツ！

ふんぬくっ！

ギギギギ……ッ!!

あ、あれえ？

いくら引つ張ろうと何かが台座に引つかかっているようでつつかえてしまう。

……

………嘘だろ、ここまで来て!?! 完全に成功する流れだったよね

コレ!?

ちくしょう。かくなる上は台座ごと……ん？

そんなことを考えていると、入り口の方から複数の何かが近づく音、パチパチと何かが燃える音が聞こえてきた。

灯りが近づいてくる。

灯りに照らされた壁に映っている影は、人の形をしていた。

——誰かが来たようだ。

待ってたよ！ この瞬間ときをよお!!

誰かに会えるという事が、こんなにも嬉しく感じるのは前世を通してもこれが初めてだろう。

孤独と嬉しきでテンションがおかしくなってる気もするがそこは許してほしい。

やがて、足音が大きくなってくる。声からして男と女だろうか。

「――！」
「――！」
何か話しているようだ。

この距離だとよく聞こえないな、もう少しこっちに来ておくれー
俺は無い耳を澄ましてみる。

「――やっと着きましたねアニキ！」

「おう！　こんな古そうな遺跡なんだ、きつとお宝が眠っているに違いないぜ！」

訪れたのは、例えるなら中世のファンタジーな物語に出てきそうな格好をした二人組だった。

「さすがアニキ！　目の付け所が違うツスね〜！　……でもいいんんっスか？」

「あん？　なにがだ」

「私達がしている事って、いわゆる遺跡泥棒ってやつツスよね？　これって犯罪なんじゃ……」

どうやら、やって来たのは遺跡泥棒だったようだ。

不安げに尋ねる子分口調な女に対しアニキと呼ばれている男は「ばっかお前、こういうのはな、バレなきゃあ犯罪じゃあねえんだよツ！」と活を入れている。

バレてるぞ、おい。

なんなら俺の心のメモリーに録画してやったぞ。

「流石っす！　アニキ！」

「だろオ？　もつと褒めてもいいんだぜ！」

楽しそうな二人を尻目に、俺はスキルの【解析演算】と【鑑定】を使用して、二人のステータスを確認してみる。

《解析が完了しました》

《ステータスを開示します》

【名称】：アニー・キィ　【年齢】　26

【種族】：人間

【職業】：冒険者
【加護】：なし
【称号】：なし
【状態】：なし
【魔法】：なし
【技能】^{スキル}：【物理耐性Lv8】【毒物耐性Lv6】【剣術Lv2】【解体Lv2】

【名称】：セレナ 【年齢】 18
【種族】：人間
【職業】：冒険者
【加護】：なし
【称号】：なし
【状態】：なし
【魔法】：なし
【技能】^{スキル}：【物理耐性Lv5】【毒物耐性Lv7】【武術Lv3】【解体Lv4】【怪力Lv3】

……体力や魔力量の解析は出来ないのか？
流星にそこまで都合よくはいかないみたいだな。

それにしても、二人とも物理と毒物の耐性だけ異様に高いな、やっぱり冒険者ってそういうことに会う機会が多いのだろうか？

ステータスを覗いている間に遺跡泥棒たちは茶番が終わったようで、辺りをあさりだした。

次々と運び出されていくお宝たち、このまま俺も連れ出してくれよー。

しばらく様子を見てみるとセレナが近づいてきた。

お、やっと俺の番か、丁寧に運んでくれよ？

セレナは台座に置かれた俺を取ろうと持ち上げようとするが、やはり「ガコッ！」と何かがひっかかっぴつかっぴつかえてしまう。

「あれえ？ 取れないツスね」

